

他誌掲載原稿

第VI章

被災地におけるサロン活動の意義と課題

～福島県外避難者を対象としたサロン活動の経過から～

【みやぎ心のケアセンター】 渡部 裕一／大場 幸江／大泉 みのり／樋口 徹郎

I 調査の目的

2011年3月11日に発生した巨大地震により、太平洋沿岸域には津波が到来、死者行方不明者18,430名（2019.3.10時点）という甚大な被害が生じた。さらに福島第一原子力発電所事故が発生し、多くの福島県民が県外避難を強いられることとなった。隣県の宮城県には、福島県沿岸域の市町村から多くの方々が避難し、その後避難者を対象にしたいいくつかのサロン活動が開催されるようになった。それらは現在も複数の支援団体によって継続されている。

みやぎ心のケアセンターでは、他団体が開催していたサロン活動の1つに2014年度から協力することになり、2017年度からは主催団体として活動を引き継ぐことになった。内容は季節ごとの行事、食事作り、茶話会などで、参加者が各自に差し入れを持ち寄るなど、和やかな雰囲気で開催されている。

震災から8年が経過し、宮城県が提示する震災復興計画も終盤に差し掛かっている。また、このサロン活動についてもその進退や意義が問いかれている。本研究では、参加者へのアンケート調査ならびにヒアリング結果から、このサロンが持つ意義について検証するとともに、県外避難という特殊な状況下におかれた方々が直面する課題について報告する。

II 調査内容

1 対象

- ・サロン参加者18名
- ・年齢： 74.8 ± 6.3 (61～87) 歳
- ・性別：男性7名 (38.9%) 女性11名 (61.1%)
- ・調査実施期間：平成31年2月～3月

2 実施方法

サロン参加者に対し以下の2つの方法を用いて調査を行った。

- 1) 健康関連QOL (HRQOL: Health Related Quality of Life) 尺度SF-8と独自作成した質問票を郵送、参加者に対するアンケート調査を実施した。生活状況や健康度について把握するとともに、サロンをどのようにとらえているかについて確認した。
- 2) 現在の参加者並びにサロンの運営に関与してきた関係者へのヒアリングを実施した。参加者に対しては、主に生活状況についての聞き取りを実施。関係者にはサロン成り立ちまでの経緯、これまでの運営上の課題等について聞き取りを行った。

III 結果

アンケート回収率は100%で欠測値はなかった。SF-8では2007年国民標準値と比較すると全般的に得点率は低い傾向となったが、平均年齢を考慮すると必ずしも低いとは言い切れない。

独自の質問項目に対する回答では、サロンが参加者の外出や交友範囲を広げるきっかけになっており（「Q.外出の機会になっている」大いになっている・少しななっている83.3%）（「Q.交流範囲が広がった」非常にそう思う・ややそう思う88.9%）、サロン活動の今後についても継続を望む声が多いことがわかった（「Q.サロンの今後について」出来るだけ長く継続してほしい・もうしばらく継続してほしい77.8%）。

ヒアリング結果からは、サロンの継続を望む声が多い一方で、全て自主運営で継続することに困難さを感じ

じており、何らかの外部支援が必要と考える参加者が多いことが明らかとなった。また、参加者は事故後すぐに宮城県内に転居した訳ではなく4回～14回（平均7.2回）に及ぶ転居を繰り返していたこと、避難や転居の過程で身体的、精神的な不調を感じた方々が少なくなかったこと、現在も生活基盤の確保や将来設計に対する不安を感じている方がいることが明らかとなった。

IV 考察

今回の調査では、震災から8年が経過した現在でも「あいまいな喪失」の中で生活している人たちが多いことが推察された。ヒアリングではこれまでの避難先で「賠償金は沢山もらったの？」等の質問をされ傷ついた、との回答が複数あった。避難先で傷つく経験をしながら度重なる転居を繰り返してきた人たちにとって、地元のことを気兼ねなく話せ、震災後の気苦労をいたわり合えるこのサロンは貴重な場である。一方で、プログラム内容のあり方や今後の運営に対する要望等も上がっており、サロン活動のあり方を具体的に検討する場が今後必要になると考えられる。

被災地におけるサロン活動の意義と課題
～福島県外避難者を対象としたサロン活動の経過から～

渡部 裕一(発表者) 大泉 みのり
大場 幸江 橋口 敬郎

公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会
心のケアセンター
Miyagi Disaster Mental Health Care Center

本発表に用いる人物写真的使用については、本人の承諾を得ています。

はじめに サロン立ち上げまでの経緯

- 2011年3月11日の東日本大震災により沿岸域には津波が到来、甚大な被害を被った。
- さらに原子力発電所事故により、多くの福島県民が県外避難を強いられた。
- 宮城県にも多くの方が避難し、その後避難者を対象にしたサロンが開催された。
- みやぎ心のケアセンターでは他団体が実施するサロンに協力。2014年度から引継ぎ、主催団体となった。

サロンの概要

開催頻度	毎月1回、金曜日の午後に開催
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> お茶会、調理、お花見などの季節に応じた行事が中心。 その他、参加者からの要望に応じて企画。
特徴	<ul style="list-style-type: none"> 他のサロンに比較すると男性の参加率が高い傾向。 登録者は20名程。毎回の参加者数は15~18名程度夫婦での参加率も高い。 概ねメンバーが固定されており、毎回の参加者数の増減は少ない。 自己負担は概ね200円~2000円の範囲。

調査の目的

- 復興支援計画も終盤となった現在、今後のサロン活動のあり方が問われている。まずは参加者の**現状とニーズを正しく把握**する必要がある。
- このサロンの取り組みを分析することは、**今後の災害時のサロン活動、ひいては災害支援のあり方に対する示唆となり得ると考えたこと。**
- 震災と原発事故によって県外避難を強いられた方々は、特有の経過や課題を抱えており、**避難者の実状**想いを広く発信する必要がある。

調査の概要

1 対象 サロン参加者18名
・年齢 74.8±6.3(61~87)歳
・性別 男性7名(38.9%) 女性11名(61.1%)

2 実施方法 以下の2つの方法を用いて調査を行った。
(2019年2月実施)

調査項目	内 容
アンケート調査	①健康関連QOL尺度 SF-8 ②独自作成のアンケート項目 生活状況や健康度、サロンに関する意見を確認
ヒアリング調査	参加者の生活状況とサロンに対する具体的な意見について * サロン運営の関係者にもこれまでの経緯、課題等について聞き取りを実施。

・福原 俊一、鈴飼 よしみ、SF-8日本語版マニュアル:特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

調査結果 SF-8

公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会
心のケアセンター
Miyagi Disaster Mental Health Care Center

アンケート調査結果 SF-8項目

回答項目	平均値
全般的にみて、過去1ヵ月間のあなたの健康状態はいかがでしたか。	43.660
過去1ヵ月間に、体を使う日常活動(歩いたり階段を昇ったりなど)をすることが身体的な理由でどのくらい妨さまたげられましたか。	28.860
過去1ヵ月間に、いつもの仕事(家事も含みます)をすることが、身体的な理由でどのくらい妨さまたげられましたか。	33.631
過去1ヵ月間に、体の痛みはどのくらいありましたか。	43.718
過去1ヵ月間、どのくらい元気でしたか。	30.256
過去1ヵ月間に、家族や友人とのふだんのつきあいが、身体的あるいは心理的な理由で、どのくらい妨さまたげられましたか。	39.858
過去1ヵ月間に、心因的な問題(不安を感じたり、気分が落ち込んだり、イライラしたり)に、どのくらい悩まれましたか。	31.789
過去1ヵ月間に、日常生活活動(仕事、学校、家事などのふだんの行動)が、心理的な理由で、どのくらい妨さまたげられましたか。	41.180

・福原 俊一、鈴飼 よしみ、SF-8日本語版マニュアル:特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

アンケート調査結果 SF-8項目

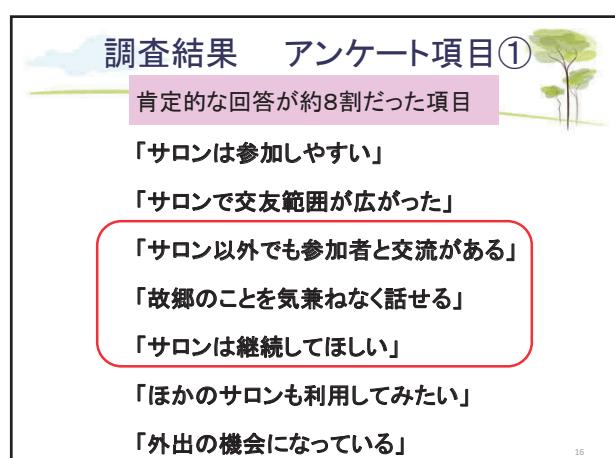
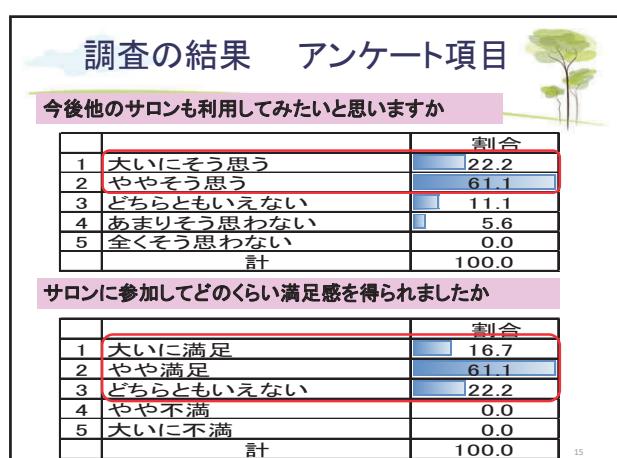
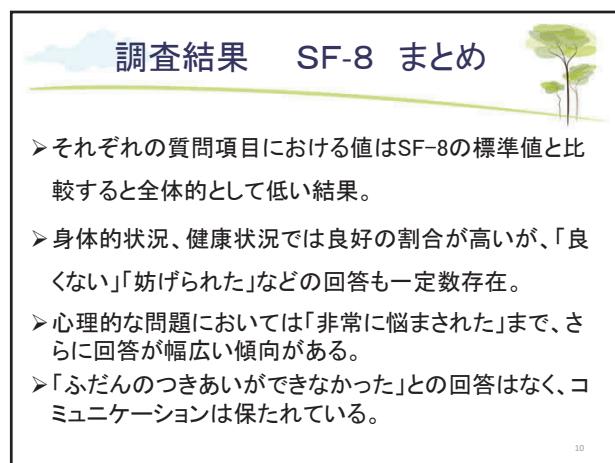
全般的に見て過去1か月間のあなたの**健康状態**はいかがでしたか。

	割合
1 最高に良い	0.0
2 とても良い	11.1
3 良い	61.1
4 あまり良くない	16.7
5 良くない	5.6
6 ぜんぜん良くない	5.6
計	100.0

過去1ヶ月で体を使う日常活動をすることが**身体的な理由**でどのくらい妨げられましたか

	割合
1 ぜんぜん妨げられなかった	33.3
2 わずかに妨げられた	38.9
3 少し妨げられた	11.1
4 かなり妨げられた	16.7
5 体を使う日常活動ができなかった	0.0
計	100.0

・福原 俊一、鈴飼 よしみ、SF-8日本語版マニュアル:特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004



調査結果 アンケート項目②

- サロンに対して「とても参加しやすい」、プログラムの内容について「とても楽しい」とする回答割合は少なかった。
- サロンで「原発のことが話題になる」との質問項目においても「大いに話題になる」との回答数は少なく、分散する傾向があった。
- ほか、質問項目「サロンに参加したことで生活に変化はあったか」「福島県内や居住地の情報が得られている」に対する「大いに変化した」「大いにそう思う」の回答割合も少ない傾向となつた。

17

調査結果 ヒアリング



18

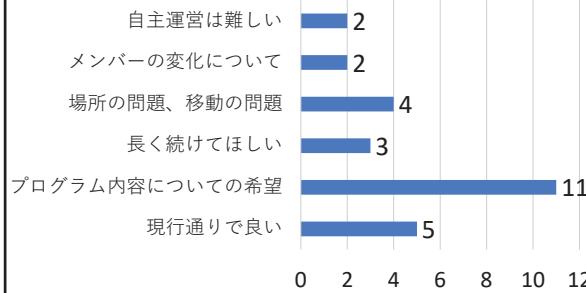
ヒアリング結果から

避難・転居回数	平均 7.2回 (4回~14回)
宮城県居住年数	平均 5.37年 (3年~8年)
サロン参加年数	平均 3.97年 (1年~6.5年)

19

ヒアリング結果から

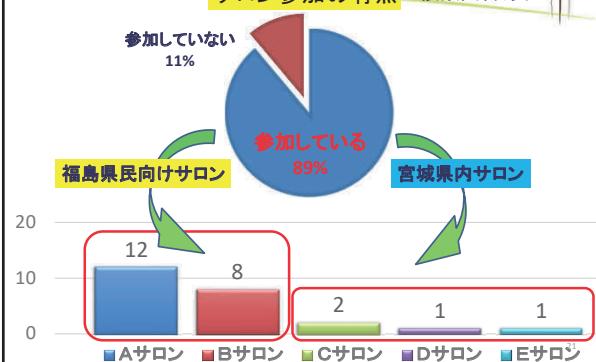
現在のサロンへの要望



0 2 4 6 8 10 12

ヒアリング結果から

サロン参加の有無 複数回答あり



調査結果 ヒアリング

「昔は一日働けたのに、精神的に出来なくなつた。」「避難所で身体面で不調が生じた。」

- 参加者は宮城県に居住するまでに相当数の避難と転居を繰り返しており、心身に対する負担も大きかつたことが明らかとなつた。
- 「夕食は長男宅で食べている。」「同じ市内にいる孫と遊ぶ。」
- 家族が「減少した」との回答割合も高いが、何らかのつながりは維持されており、孤立状況ではない。
- 「こじんまりしていた時の方がよかったです。」「もっと参加者が増えてほしい。」
- プログラムに対する多様な要望をそれぞれが持っている。サロン成り立ちに由来すると考えられる。

22

「お金があると思われないように気を付けています。」「福島から転居したことを告げると、賠償金の話になるので被災者といわないようにしている。」

- 参加者の多くが避難の過程で心無い言葉に不快な思いをした経験を持っている。

「地元に戻るか、宮城で事業を始めるか迷っている。」「お墓もあるので戻りたいが、戻っても何もない。」「地元に戻りたいが、子どもに反対されている。」

- 震災から8年経った現在、前向きに居住地でのつながりを広げようとする人、これから先どうするか判断しかねている人、日々の暮らしに虚無感を感じている人などさまざま。

23

考 察



24

考 察 1/3



【避難後の生活がおよぼした影響】

- ①避難の過程で生じた心身への負担。
- ②賠償金等に対する周囲の声。
- これらが福島県避難者のみを対象としたサロンへの参加率の高さに影響か。
- 質問項目「故郷のことを気兼ねなく話せる」への高評価にもつながっている。

25

考 察 2/3



【サロンに求められている要素】

- ヒアリングから参加者の背景の多様さ、複雑さがあきらかに
- 「参加のしやすさ」「プログラム」評価、「原発が話題になる」の回答幅に影響している可能性。
- このサロンの特色は「プログラムの中身より雰囲気？」

26

考 察 3/3



【参加者が抱える現在の課題】

- 現在も抱える先行きの不安と葛藤。
- 「過去の生活への深い愛着」と「現在の生活を大切にする感情」が共存する「曖昧な喪失」
- その狭間を「行き来」できるのが現在の居住地といえる。
- 質問項目「サロン以外でも参加者と交流」の割合高い。
- レジリエンスを培う場としてのサロンの役割。

27

ま と め

- ようやく居住地でのつながりが広がりつつある一方、引き続き、サロンの継続を望む声、気兼ねなく話せる場に対するニーズは依然として高い。
- 復興支援事業の整理の中で、参加者ニーズが見失われることのないようにすることが支援者の役割。
- 今後のさまざまな状況の変化も考慮しつつ開催を検討していきたい。



28